

八月の短歌

八月一日

「自家製のヨーグルトなりと朝食に添へて出
す妻 ありがたきかな」

「この宇宙は百三十余億歳とたわいなき事も
言ふなり人とふものは」

八月二日

「渡りゆく長良川上花火乱舞 西に三日月し
んと鎮まる」

「大玉が破裂し空より河の面（も）をギラギ
ラ焦がす 鮎の絶叫」

「間近にて見し花火いま遙かなる北にあぶく
のやうにをどれる」

戦争と平和

「観念にとどまる『平和』は具体性もつ『戦争』に所詮かなはぬ」

「『平和』という概念にいかなる具体性持た

せられるかが問題である」

「戦争と平和はつまり動と静 また表・裏にして不可分なるか」

「動と静、悪と善、また醜と美など二律背反にして俱に在るもの」

「相矛盾する戦争と平和とを弁証法的に止揚せむ智慧」

八月六日

「しゅわしゅわと蝉鳴く中を広島原爆忌今日もしづかに暮れて」

「街灯も届かぬ闇のくすのきの葉叢に盛んに

油蝉鳴く」

「日を好む性（さが）なるはずを油蝉

闇の

梢に鳴く狂気あり」

「蝉さへも闇に鳴く世の狂態はそつとしをか

む小市民われは」

八月十日

「台風は遠退（とほぞ）きたれど木曾川に濁

流渦巻き逆光にまぶし」

「河に沿ふ原生林が白鷺の繁殖地にて雛ら羽

ばたく」

八月十一日

「風さほど吹かざりしかど構内は青葉の切れ

端 広 く 散 ら ば る ー

「 増 水 し 濁 れ る 池 に 鴨 家 族 水 草 の 辺 (へ) に
寄 り 添 ひ て 鳴 く ー

「 嘆 く と も 見 え て 満 月 お ほ ふ 雲 裂 け た る 縁
に 光 の 滴 ー

八 月 十 二 日

「 逃 げ 得 ず し て 汗 か き 目 覚 め し 現 実 も 雲 霞 の
ご と く 得 体 の 知 れ ぬ ー

「 を を を を と 満 月 厭 (いと) ひ て 喚 (おら)
ぶ な り 身 の 内 に 棲 む 餓 鬼 畜 生 が ー

「 流 れ 雲 十 五 夜 の 月 を 撫 で て ゐ て 地 に 臆 病 な
犬 吠 え や ま ぬ ー

八月十四日

「近付ける火星かがやき満月に寄り添ひをら
む雲の向かふで」

「精霊を迎へ送らむ 地には地の天には天の
摂理あるべく」

八月十五日

「人皆の固唾を呑みて聴き入りし玉音放送が
出回る世なり」

その録音がテレビやラジオのドラマでさか
んに使われ、またCDにして売られるという。

「鴨家族子鴨らにはかに成長し芥の池に鬼ご
っこをす」

平成十五年八月の短歌「7」

八月十八日

「御嶽山（おんたけ）に己が時間を拾はむと
来しがいつしか雲間に迷ふ」

「神××神など八百万の神沿道に並ぶ御

嶽山（おんたけ）」

「御嶽山（おんたけ）の嶺を裏みて雲塊の激
しく動くを妻と観て佇（た）つ」

八月二十日

「霧雨の開田高原 木曾駒に手触れてにこに
こせる妻はよし」

「辿り来し奈良井宿にて中仙道古（ふる）杉
並木を二十メートル味はふ」

「塩尻より乗りし高速道路いま夜雨（やう）

に煙れどびゅんびゅん飛ばす」

時間を創る」

「クマゼミとツクツクホウシが競ひあひ暑き

朝（あした）を音声（おんじょう）に浸す」

「あれほどに世を騒がせし蝉声の今か消ゆべ
くかすかに残る」

八月二十四日

「直ぐそこまで来ている火星へ未来線宇宙号
に乗って行きたい」

「星々にたとへやうなき憧れを抱くは星のか
たわれ我ら」

「天球の真洞の闇にあかあかとされど沈沈（
ちんちん）たる第四惑星」

八月二十五日

「激痛も意味ある生の証とぞ終末医療を否定する論」

「人生無意味症候群が現代の最も悪しき病と

いふ論」

「人生の意味を問ひたきこと自体最も悪しき病といふ論」

八月二十七日

「狭き部屋の二重の書棚にぎっしりと本、書類など無粋に並ぶ」

「ある時は越えねばならぬ境界線たれにも在らむ線路を跨ぐ」

「脳の機序単純なりと説く論あり異議あれど

むなし論といふもの」

八月二十八日

「一国の暴君たりし痴れ者を賞金賭けて捜す

はバカだろ」

「世の中が如何にいびつで擦れてても賞金首

だけは真っ平ゴメン」

………

「闇黒の池より鈍き悲鳴あがり飛び上がりし

は鶴（ぬえ）かお化けか」